

## 5. 嘉納治五郎と本田存について

東京外国語大学 東 憲一

### 5. Relationship Between Jigoro Kano and Ariya Honda

Ken-ichi HIGASHI (Tokyo University of Foreign Studies)

#### Abstract

The purpose of this study is to analyze the relation between Jigoro Kano (1860-1938) and Ariya Honda (1871-1949) in chronological order and to elucidate their relationship. The research method used here is material analysis.

The results of the research have concluded as follows regarding the relationship between Jigoro Kano and Ariya Honda.

Ariya Honda was born in a family of Shizoku (a warrior class) in Tatebayashi, Gunma Prefecture. Ariya came to Tokyo and started his Judo practices under the guidance of Jigoro Kano. He was 19 years old when he was certificated as Sho-dan (the first dan-grade) by Kodokan. Along with his engagement in Judo, Ariya participated in a Japanese traditional swimming stylistic school, Suifuryu-Ohtaha, and later became a master in the school. At the age of 26, while continuing his training both in Judo and Suifuryu-Ohtaha, he entered Tokyo School of Foreign Languages, a predecessor of the present Tokyo University of Foreign Studies, where he studied Korean in Korean Language Major. He was 29 years old when he attained a position of assistant professor in the major at the same time as his graduation. In this way, Ariya engaged himself aspiringly in his Korean Language study as well as in Judo and Suifuryu-Ohtaha swimming practice. It is also notable that he is the founder of Judo Club in Tokyo School of Foreign Languages.

In his swim career, Ariya coached Suifuryu-Ohtaha swimming in a private school founded by Jigoro Kano. He also taught in Tokyo Higher Normal School and its attached junior high school. In his Judo career, he gave technical coaching at Kodokan as well as teaching Korean as a professor at Tokyo School of Foreign Languages. Ariya continued Judo coaching in Kodokan even after his retirement from the school, and started his study in Judo again under the

tuition of Jigoro Kano. Ariya's research achievement is especially prominent in the field of women's Judo. Holding important position in Kodokan office, he received Hachi-dan (the 8th dan-grade) certification in 1944 at the age of 73, and was also awarded the title of "Kodokan Genrou" by Kodokan in 1946 at the age of 76.

From the result of analysis indicated above, it has been shown that Ariya Honda played an active role in spreading Suifuryu-Ohtaha swimming and coaching Judo as Jigoro Kano's "Right-hand man", and successively held important posts at Kodokan office in his later years. In the meantime, his contribution on Korean Language education was also quite considerable. The further reevaluation of Ariya Honda should be expected regarding his remarkable achievements both in Kodokan and Tokyo School of Foreign Languages.

## 1. はじめに

本田存（ほんだありや）（1871年：明治4年～1949年：昭和24年）は嘉納治五郎（万延元年：1860年～昭和13年：1938年）の下、講道館において嘉納塾での水泳指導、柔道指導・指導法研究、講道館事務職を歴任した。また、嘉納が東京高等師範学校校長時代、東京高等師範学校や東京高等師範学校附属中学校での水泳指導を行った。嘉納と本田は水泳、柔道、講道館事務、東京高等師範学校等に於いて深い結びつきが見られる。嘉納と本田との関係については真田ら<sup>1)</sup>による「水術」の研究や、講道館に於ける文献<sup>2)、3)</sup>、「東京外語柔道部史」<sup>4)</sup>に見られる。また、本田は東京外国語学校に於いて朝鮮語の教授を務めたことから「東京外国語学校・東京外国語大学」関係者<sup>5)、6)</sup>に本田についての記述が見られる。

以上のように嘉納と本田の関係は様々の視点から見られるが、本研究に於いては嘉納と本田の関係を分析、考察することを目的とする。時系列的に分析、考察することにより、水泳、柔道指導・指導法研究、講道館事務職だけの視点のみならず、相互の関係の視点から分析、考察することにより、先行研究には見られない嘉納と本田の関係が明らかにされることが期待される。

## 2. 嘉納治五郎と本田存を巡る事項の時系列的分析と考察

- ・1860年（万延元年）嘉納治五郎生誕。
- ・1871年（明治4年）嘉納12歳。本田存生誕（出生地群馬県館林。旧士族）。
- ・1873年（明治6年）嘉納14歳、本田2歳。  
旧東京外国語学校開設（英、仏、独、魯、清の五学科）。
- ・1874年（明治7年）嘉納15歳、本田3歳。

嘉納が旧東京外国語学校英語科に入学し、英語及び普通学を学ぶ。英語科は分離独立し東京英語学校となり、更に東京大学予備門となる。英語科が分離独立したのは当時の官界、商工界が英語を重視したことと、英語専攻受験生が他の語学科と比べ全体の半数近くを占めていたことによるものである。開成学校や東京大学に於ける外国人による教授用語は主に英語であった。この当時の旧東京外国語学校、東京英語学校、開成学校、東京大学等に於ける外国語教育については拙稿<sup>7)</sup>を参照されたい。

- ・1878年（明治11年）嘉納19歳、本田7歳。

旧東京外国語学校に朝鮮語学科が開設された。朝鮮語学科の名称については、1897年（明治30年）に設置された高等商業学校（現一橋大学）附属外国語学校では韓語学科となっている。

1899年（明治32年）に高等商業学校附属外国語学校から独立して東京外国語学校となった後、1906年（明治44年）に朝鮮語学科と名称を変えている。東京外国語大学の専攻語は世相を反映し、現在に至るまで校名や修業年限、時の対外政策により専攻語の設置や廃止が行われた。旧東京外国語学校、高等商業附属外国語学校、東京外国語外国語学校を経て1944年（昭和19年）には東京外事専門学校に、1949年（昭和24年）には東京外国語大学となった。本田が入学して学んだ高等商業学校附属外国語学校の韓語学科の変遷と廃止事由については後述する。後に本田が水府流太田派を学ぶが、水府流太田派の創始者である太田捨蔵（1831年：天保2年～1892年：明治25年）が隅田川に「水府流太田道場」を開設した。

・1882年（明治15年）嘉納23歳、本田11歳。

2月嘉納塾創設。3月～4月弘文館（英語学校）創設。5月講道館創設。7月に東京大学文学部および審美学科を卒業し、8月に学習院教師に任ぜられる。

・1888年（明治21年）嘉納29歳、本田17歳。

嘉納、谷干城学習院不在中、学習院事務取扱を命ぜられる。この頃、本田は海軍を志し、攻玉社で学ぶと共に、講道館に入門した。講道館に入門した理由を雑誌「柔道」に於いて攻玉社で学んだ理由と講道館に入門した理由が述べられている<sup>註1)</sup>。攻玉社は現在の攻玉社中学校・高等学校の前身である。創始者の近藤真琴は1863年（文久3年）に数学・オランダ語・航海術等を教授する蘭学塾を開設した。幕末から明治初期にかけて多数存在した洋学塾の一つである。その後、明治になり海事に関する教授を行い1889年（明治22年）に海軍予備科を設置した。海軍に於ける必須の一つは泳力であるが、本田が海軍を志したので、太田捨蔵が1878年（明治11年）隅田川に開設した「水府流太田道場」にこの年弟子入りした理由も推測される。本田は後に水府流太田派四代師範となる。嘉納はこの年9月より欧州を中心に外遊に出発した。

・1890年（明治23年）嘉納31歳、本田19歳。

嘉納渡欧中。本田は講道館初段となる。本田が講道館に入門したのが前年の6月であり、嘉納が渡欧したのが9月であるから初段昇段にあたって嘉納から多くの指導を受けていないことが推察される。嘉納不在中は西郷四郎、岩波静弥、本田増二郎が講道館の事務にあたっていることから、これらの人物を中心として何らかの指導を受け初段に昇段したことが考えられる。

・1893年（明治26年）嘉納34歳、本田22歳。

嘉納が高等師範学校校長に任ぜられた（第1期：1893年：明治26年～1897年：明治30年）。嘉納塾同窓會雑誌第一號発刊。本田は講道館貳段に昇段し、明治義會中学校、高等師範学校附属中学校で柔道指導を行った。

・1896年（明治29年）嘉納37歳、本田25歳。

高等師範学校に運動会設立。嘉納塾同窓會雑誌九號<sup>註2)</sup>に本塾海水浴場の記事が初めて見られる。詳細については同雑誌録中「松輪海水浴記事」に記載されている<sup>註3)</sup>。これによると後の嘉納塾海水浴に於ける水泳訓練というより、暑中休暇中に於ける有志の過ごし方の一環として始まり、参加も分散している。また、三浦半島松輪の地を選定し、宿泊施設の松輪館を選定した事由が書かれている。当時は霊岸島（東京都中央区）より東京湾汽船で松輪に赴いていた。後に水泳指導にあたる本田の名前はまだ見られない。

・1897年（明治30年）嘉納38歳、本田26歳。

8月、嘉納が高等師範学校校長非職を命じられ、11月再び高等師範学校校長に任ぜられた（第2期：1897年：明治30年～1898年：明治31年）。「國土」第一號発行。高等商業学校に附属外国

語学校を設置。韓語学科設置に伴い、本田が韓語学科に入学、韓語学科志望の事由は不明である。この年の嘉納塾同窓會雑誌十二號に松輪に於ける「水泳先發隊」、「松輪行後發隊」、「海水浴者帰着」の記事が短文で見られるが、嘉納塾同窓會雑誌第十二號附録「松輪水泳記事」中、水泳の目的が掲載されている<sup>註4)</sup>。これによると水泳の目的は第一に夏を過ごす健康のためであることが掲載されている。

・1897年（明治31年）嘉納39歳、本田27歳。

本田が講道館参段に昇段。また、1888年（明治21年）、本田17歳の時に「水府流太田道場」に入門して10年であるから、水府流太田派の要職に就いていたことは推測できる。「國土」第九號にこの年の「嘉納塾同窓會雑誌」第十五號附録「松輪海水浴日記」中に本田に関する記載が見られる。本田が水泳指導を行っていたことと、内外人競泳大会（横浜）主催委員のため中座して再び松輪に戻ったとの記載である。同號「嘉納塾同窓會雑誌」によるとこの年から本田が松輪に於ける海水浴に参加していることがわかる。

・1898年（明治32年）嘉納40歳、本田28歳。

本田著「講道館記事初心者手引き」、國土第二號、「講道館記事初心者手引き（続き）」、國土第三號。

・1899年（明治32年）嘉納40歳、本田28歳。

本田著「講道館記事初心者手引き」：國土第四號。水府流太田派太田捨藏遺稿編纂『日本游泳術』が高橋雄次郎により「國土」第九號付録に掲載された。また、「國土」第十二號中、隅田川上流で行われた「内外人競泳」で審判を務めた本田存に大会の様子を聞いた記事が掲載された。同じく「國土」第十二號中「松輪游泳場」記事中、講道館三段の本田が副監督兼游泳教師を務めたとある。それまで嘉納塾では「海水浴」という用語が主であったが「游泳」という用語を用いるようになった。これは水府流太田派の『日本游泳術』の「游泳」によるものもあるであろうが、この頃、本田が松輪に於ける嘉納塾の游泳指導を始めていることから本田の影響も見逃せない。夏期海水浴の効用を認識した嘉納と水府流太田派の遊泳術を嘉納に結びつけたのは本田であったことは過言では無いと考えられる。嘉納塾に於いては、単なる海水浴から游泳という名の日本泳法を用い、能力別に分け組織的に游泳の教育・指導を行った。太田捨藏による『日本游泳術』の底本『大日本遊泳術』では遊泳術の必要性について、第一：國民の義務、第二：人命の保護、第三：徳育上の効果、第四：精神の保養、第五：體育上の効果としているがこの点からも嘉納の考え方に近いものがあつたのであろう。本田が嘉納の柔道と水泳に対する考え方が近いことと、嘉納が本田の水泳指導に全幅の信頼を寄せている事が分かる<sup>註5)</sup>。

嘉納は松輪に行く塾生に講話を行い、度々松輪を訪れている。水府流太田派太田捨藏遺稿編纂『日本游泳術』が掲載されたのは講道館で水府流太田派に最も近い立場にあつた本田の影響が考えられる。高等商業学校附属外国語学校が東京外国語学校として独立した。

・1900年（明治33年）嘉納41歳、本田29歳。

柔道に関しては講道館研究会（主幹、富田常次郎、永岡秀一、本田存）が創立された。本田も同研究会に参加。富田常次郎、永岡秀一らの有力者から考えると本田の柔道や柔道指導の業績の一例である。水泳に関しては、「日本游泳術」が出版（造士會叢書）された。また、造士會游泳実習第一水泳場を松輪にて行う。監督富田常次郎、日本泳法各派より教師参加。造士會游泳実習第二水泳場を上宮田にて行う。東京高等師範学校附属中学校（高師附属中学）が游泳実習を行い、水府流太田派の游泳教師が参加した。これは後に高師流と称される東京高等師範

学校（東京高師）に於ける日本泳法各派の要素を取り入れた游泳と、高師附属中学に於ける水府流太田派による游泳指導の始まりと考えられる。

嘉納は講道館柔道を始めるにあたり、従来の柔術・柔等の他流の長所を研究、修得し講道館柔道の参考とした。後に空手や合気道からも学んだ。これらは嘉納の柔軟な発想によるところであると考えられる。嘉納の柔軟な発想は幼少の頃から和洋の学問を学び、東京外国語学校英語科、開成学校、東京大学に於いては英語学と共に西洋の学問を学び、二松学舎では東洋の学問を学んだ。単に西洋や東洋の学問を学ぶのみならず、排他的に陥ること無くそれぞれの長所を見極め、融合した。後に高師流となる遊泳術も水府流太田派に固執すること無く日本泳法各流の指導者を招いたことは嘉納の柔軟な発想の一例であろう。

本田は東京外国語学校韓語科卒業。卒業と同時に同校韓語科助教授に任ぜられる。1878年（明治11年）旧東京外国語学校に朝鮮語学科が開設されて以来、校名や所属の変更を経た東京外国語学校であるが、同校朝鮮語学科・韓語科卒業生の初の日本人専任教員である。本田の朝鮮語の能力の高さが伺える事例である。

・1901年（明治34年）嘉納42歳、本田30歳。

高等師範学校校長に任ぜられる（第3期：1901年：明治34年～1920年：大正9年）。造士會游泳実習第二水泳場を神奈川県三浦郡上宮田から同金田に移転。

・1902年（明治35年）嘉納43歳、本田31歳。

1880年（明治13年）に設立された高等師範学校寄合會は1901年（明治34年）東京高等師範学校校友會と改称し、本年、校友會誌第一號が発行された。校友會は談話部會と運動部會からなる。校長が校友會會長に推戴された。同號に水泳部創設の計画があると記されているだけで水泳部の記述は見られない。本年発行の校友會誌第二號には千葉県館山の北條海岸で日本泳法小堀流第七代師範小堀平七を招聘し指導を受けたとの遊泳部の記述が見られる。東京高等師範学校水泳部（遊泳部）は明治35年に設立されたと考えられる。北條での高師遊泳訓練には嘉納は度々訪れている。嘉納の清國巡遊（7月～9月）がなされる。本年発行の「嘉納塾同窓會雜誌」第二十二號中、本田が游泳に関して必要な心得を話したことと、游泳教師本田が游泳に関する沿革及び効用を説いたとの記述が見られる。

・1903年（明治36年）嘉納44歳、本田32歳。

本年発行の「嘉納塾同窓會雜誌」第二十三號中、水上監督に本田が主任であるとの記述が見られる。また、第一水泳場は神伝流、觀海流等が指導にあたり、第二水泳場は水府流太田派が指導にあたった。本田は東京外国語学校柔道部初代部長に就任し、大韓帝国に留学した。

・1904年（明治37年）嘉納45歳、本田33歳。

本年発行の校友會誌第四號には遊泳部ではなく水泳部としての記述が見られる。嘉納塾の記述も当初は水泳、遊泳の名称が不確定である。同號によれば、今夏は神傳流の上田成彌と神傳流日本游泳協會假會長植原銃郎に遊泳術の教授を乞うたとある。本年発行の校友會誌第五號に各流各派に捉われない東京高師遊泳部の方針が述べられている<sup>註6)</sup>。このことより、東京高師遊泳部が嘉納塾の本田存による水府流太田派の遊泳に捉われず、且つ各流各派に偏せず囚われずに教育としての遊泳を目指していることの流れであろう。つまり嘉納塾では柔道と遊泳の結びつきであり、東京高師では学校教育の一環としての遊泳である。嘉納塾も東京高師も嘉納の下にありながら、遊泳の教授陣は同じものではない。嘉納の柔軟な発想と目的による手段の違い分けであると考えられる。

本年発行の「嘉納塾同窓會雑誌」第二十四號によれば、各種泳法の習得、遠泳、進級などが有り、水術大会が行われている。本田は監督として名が記載されている。また、本田が千葉県富浦で行われた東京高師附属中学游泳実習の指導を行った。この頃から本田は松輪に於ける実際の水泳指導に名前が見られず、富浦に於ける東京高師附属中学の指導に移ったと考えられる。この点の経緯については不明である。本田が東京外国語学校韓語学科教授に任ぜられた（韓語科から韓語学科に改称）。

・1905年（明治38年）嘉納46歳、本田34歳。

東京高師予科生全員游泳実習参加へ（千葉県北條海岸。宿舍芳躰舎完成）。本田が講道館幹事に任ぜられる。

・1906年（明治39年）嘉納47歳、本田35歳。

本田が東京高師の遊泳師範として他流の師範と共に千葉県北條海岸に於いて泳法指導にあたる。この件は、本年発行の校友会誌十號に記述が見られる。東京外国語学校韓語学科から朝鮮語学科に名称変更される。東京外国語学校が関東聯合游泳大会に参加する。これは、本田が東京外国語学校教授で、水府流太田派の指導者であったこと影響が大きいと考えられる。

・1907年（明治40年）嘉納48歳、本田36歳。

本年発行の校友会誌第十一號によれば、遊泳部は各流の粹めて遊泳術を研究するのが我が部の目的であるので本年は水府流本田存、神傳流中野次郎、向井流菱倉嘉吉を遊泳師範として聘したとある。同年の校友会誌十三號の遊泳部記事によれば、諸流を統一整理したる一新波、我校特有の泳法であるとしている。これが所謂「高師流泳法」を指すのであろう。神傳流、水府流、觀海流、小堀流踏水術等を皆編入してあるとしている。校友会の會長が東京高師校長である嘉納であるから嘉納の意向が影響していることは十分に考えられる。つまり、高師流泳法の確立も、柔術・柔、その他の武道の長所を取り入れた講道館柔道の確立の手法と同じと考えられる。嘉納の柔軟な発想と揺るがない根本の思想の融合の成せる業であると考えられる。講道館では本田が講道館新道場落成式で五の形を演武する。講道館四段に昇段する。

・1908年（明治41年）嘉納49歳、本田37歳。

本田が講道館無段者及び少年組資格審査委員、幹事に任ぜられる。本年発行の「嘉納塾同窓會雑誌」第二十八號によれば、本田は松輪行きに際し、水泳に関して最も注意すべき要項について説いたとある。

・1910年（明治43年）嘉納51歳、本田39歳。

本田が講道館五段に昇段する。「韓國併合ニ関スル條約公布」。朝鮮總督府設置。韓国併合の結果、朝鮮語は外国語ではないという理由で韓語学科廃止の声が出るようになった。

・1915年（大正4年）嘉納56歳、本田44歳。

本年発行の「嘉納塾同窓會雑誌」第三十四號に「松輪水泳日記」が詳細に記載され、盛況であることがわかる。本田著「雜録遊泳上の注意」：柔道、第八號。

・1916年（大正5年）嘉納57歳、本田45歳。

本田著「能く泳ぐ者能く溺るとは何ぞ」：柔道第二卷七號。本田著「婦女子の護身法（不良男性の迫害に対する婦女子の嗜）」：柔道、第二卷七號。本田著「我国の水泳を發達せしめんが為には先ず女性の水泳を奨励せよ」：柔道第二卷八號。北條海岸に於いて文部省水泳講習會開催。東京外国語学校朝鮮語学科募集停止。その後、時を経て1977年（昭和52年）、東京外国語大学に於いて朝鮮語学科が開設された。本田による「游泳上の注意」が雑誌『柔道』第八號

に掲載された。以下、「游泳」に関する著作が多数見られる。

・1917年（大正6年）嘉納58歳、本田46歳。

本田著「柔道を始めんとする人へ」、柔道第三卷一號。東京高師校友會雑誌に於いて1907年（明治40年）代から1917年（大正6年）位までは遊泳部の千葉県北條に於ける遊泳実習が詳しく記述されていて本田の名前もよく見られ遊泳実習に参加していたことが明らかになった。その後は遊泳実習の扱いが余り見られなくなり内容も簡素な物になった。昭和に入ると遊泳部から水泳部に名称を変えた。校友會も大塚学友會と名称変更しやがて雑誌は消滅する。これは嘉納が臨時教育會議に於ける委員を務め、その影響で東京高師校長を辞任したことによる大きいと考えられる。組織の長が変わると組織も変わるものの一例であろう。この年、本田が講道館有段者資格審査委員に任ぜられる。

・1918年（大正7年）嘉納59歳、本田47歳。

本田著「柔道界時感」：柔道第四卷三號。本田著「柔道を修行する少年及父兄に」：柔道第四卷四號。本年発行の「嘉納塾同窓會雑誌」第三十七號に最後の松輪日記（大正六年度）が記載されている。「嘉納塾同窓會雑誌」本田が東京外国語学校朝鮮語学科教授を免ぜられ、東京外国語学校講師に任ぜられる（～1922年：大正12年）。その後、東京帝国大学、國學院、東洋協會専門学校（現拓殖大学）等の語学教師を歴任。

・1919年（大正8年）嘉納60歳、本田48歳。

本田著「競泳に就いて」：有効乃活動第五卷八號。11月の嘉納塾閉鎖に伴って嘉納塾の松輪に於ける水泳訓練も終わったと考えられる。

・1922年（大正11年）嘉納63歳、本田51歳。

本田著「遊泳修行上の心得」：大勢第一卷四號。本田著「女子の柔道」：柔道界第一卷二號。本田が講道館六段に昇段。講道館審議委員副主任、入門世話係主任に任ぜられる。東京外国語学校講師（～1922年：大正11年）を免ぜられる。この後、講道館柔道指導・研究、講道館事務の仕事が主流となる。

・1923年（大正12年）嘉納64歳、本田52歳。

講道館が女子部・幼年部の教授を開始。本田が講道館女子部・幼年部の教授の任にあたる。

・1926年（大正15年）嘉納67歳、本田55歳。

講道館女子部発足。京城帝国大学朝鮮語朝鮮文学科設置。

・1927年（昭和2年）嘉納68歳、本田56歳。

本田著「女子の護身法一、二、三、四」：作興六卷二號、三號、四號、五號。以後、女子柔道に関する著作多数。

・1928年（昭和3年）嘉納69歳、本田57歳。

本田が講道館幹事（内務、会計、名簿）、調査部副主任、二部（三段）主任、研究調査係に任ぜられる。

・1929年（昭和4年）嘉納70歳、本田58歳。

本田が講道館幹事（内務、会計、名簿）、調査部副主任、二部（三段）主任、研究調査係に任ぜられる。

・1930年（昭和5年）嘉納71歳、本田59歳。

本田著「独り稽古の必要」：柔道第一卷三號。本田が講道館幹事部幹事、審議員副主任に任ぜられる。

- ・1931年（昭和6年）嘉納72歳、本田60歳。  
本田が講道館館員調査委員会主事、講道館長秘書に任ぜられる。
- ・1933年（昭和8年）嘉納74歳、本田62歳。  
本田が講道館七段に昇段。講道館役員総代、企画課長に任ぜられる。
- ・1934年（昭和9年）嘉納75歳、本田63歳。  
本田著「昔時の指導振りと修行者の意気」：柔道第五卷五號。本田著「古い記録を辿りて試合者の明朗をおもふ」：柔道第五卷七號。本田著「偶感」：柔道第五卷十一號。講道館創立五十周年。本田が講道館創立五十周年記念祭委員長補佐、専務委員、常務委員、総務係常務委員、展覧会係常務委員に任ぜられる。講道館創立五十周年記念祭に於いて「今日までに於ける功労者」として表彰される。
- ・1938年（昭和13年）嘉納79歳、本田67歳。  
嘉納治五郎永眠。享年79歳。南郷次郎が講道館第二代館長になる。
- ・1939年（昭和14年）本田68歳。  
本田著「講道館今昔を語る一、二」：柔道十卷四號、五號。講道館雑誌「柔道」編纂に関する委員兼女子部補佐役（庶務課長）に任ぜられる。
- ・1940年（昭和15年）本田69歳。  
女子柔道護身法研究委員に任ぜられる。
- ・1941年（昭和16年）本田70歳。  
本田著「稽古の仕方に就き寸言」：柔道十二卷三號。「本田先生略伝」：柔道十二卷一號。柔道有終会幹事に任ぜられる。
- ・1942年（昭和17年）本田71歳。  
本田著「単独錬磨を奨む」：柔道十三卷一號。本田著「修行者の銘記すべき事柄一、二」：柔道十三卷七號、八號。
- ・1943年（昭和18年）本田72歳。  
本田著「入院中体験した病を克服し死線を突破する方法」：柔道十四卷六號。講道館審議委員監査班に任ぜられる。
- ・1944年（昭和19年）本田73歳。  
本田著「日置君を追想す」：柔道十五卷四號。本田著「故宮川一貫氏へ段追贈」：柔道十五卷八・九號。講道館八段に昇段。講道館女子部長に復す。
- ・1945年（昭和20年）本田74歳。  
本田著「女子柔道護身法発展盛況」：柔道十六卷一號。
- ・1946年（昭和21年）本田75歳。  
本田著「三船十段の稽古振りを見ての感想」：柔道十七卷二號。嘉納履正が講道館第三代館長になる。本田が講道館第三代館長嘉納履正より「元老」を授かる。庶務課長、女子部部长補佐、監査班副主任を任ぜられる。
- ・1947年（昭和22年）本田76歳。  
本田著「数々の懐旧談」：柔道十八卷一號。願によって庶務課長兼秘書課長、女子部長補佐を免ぜられる。
- ・1949年（昭和24年）本田78歳。  
本田著「温故知新談」：柔道二十卷二號。本田著「体捌きの必要」：柔道二十卷九號。本田存



永眠。享年78歳。

・1952年（昭和27年）没後

本田著「温故知新指先の逆さや胸絞めにつきての注意」：柔道二十三巻一號。

### 3. まとめ

嘉納と本田との結びつきは柔道のみならず、水泳の面でも深い結びつきがあった。柔道に共通する水泳の教育的効果を見出した嘉納にとって本田は嘉納の水泳普及の右腕になった。実際、本田は嘉納の水泳普及活動の理解のもと、嘉納塾、東京高等師範学校、東京高等師範学校附属中学校を主として各地の学校等で指導を行った。水泳普及にあたっては嘉納は講道館柔道確立と同様の手法を取ったと考えられる。即ち、柔道に共通する水泳の核心部分の理念はぶれず、周辺部分の水泳の手法については各流派の長所を見極め再編した。これが所謂「高師流」の泳法である。ただ、本田が強く関わった高師附属中学校等や戦後の附属校に於いては水府流太田派の影響が強く残り現在に至る。嘉納や本田が行ってきた日本泳法を主とする水泳指導が現代の水泳教育再考の一助となることを期待したい。本田は一般的な柔道指導のみならず、特に女子柔道の指導研究を行ってきたが、この点については今後の課題としたい。また、本田の朝鮮語の研究業績については不明である。嘉納と本田との関係は講道館事務業務に於いても関わりがあった。本田が柔道や水泳のみならず事務的能力を発揮したことに注目したい。本田のように柔道のみならず他の領域に於いても活躍する人物が嘉納の周辺に多くいたことが嘉納の業績の一つとして考えられる。

#### 註

註1) 「私が入門したのは、明治21年の6月で、17歳の若輩であった。私は以前から嘉納の道場では紹介者があれば誰にでも柔術（やわら）を教えてくれると云ふことを聞いていたが・・・中略・・・、一度は必ず絞め殺されると云ふ噂があったため、子供心にそれが恐ろしくて、修行する勇気が起こらなかつた。海軍を志すやうになってから、身体を丈夫にして置く必要上、思い切って修行に決心し、幸い友人の同郷人・・・中略・・・が塾生であったからこの人の紹介で入門することにした。」「昔時の指導ぶりと修行者の意気」七段本田存。『柔道』1934年（昭和九年五月號）。

註2) 八月本塾海水浴場「十五日相州三浦郡松輪ノ松輪館ニ本塾ノ海水浴場ヲ設ク・・・同月二十九日同場ヲ引拂ヒ繼ヒ卅日塾生諸氏一時ニ帰塾ス」。嘉納塾同窓會雜誌九號P.35。1896年（明治29年）11月。

註3) 雜録松輪海水浴記事「・・・十二有志ノ士師ニ乞フテ休暇中ノ塾生ノ合同海水得タリ」。嘉納塾同窓會雜誌九號三十五。1896年（明治29年）11月。pp.45-52。

註4) 松輪水泳記事「・・・水泳練習ノ如キハ善ク身體各部ヲ運動セシメ之ニ一種ノ活力ヲ附シ己ヲ益シ人ヲ救フノ道ヲ開クモノナレハ之ヲ忽ニスヘカラサルノミナラス吾人ノ消夏法トシテハ頗ル適當ナルモノナリコレ即チ吾人カ師ニ請フテ暑中稽古ヲ終リシ後水泳ヲ催フスニ至リシ所以ナリ」嘉納塾同窓會雜誌十二號附録「松輪水泳記事」。1897年（明治30年）12月。pp1-2。

註5) 松輪水泳日誌「・・・水泳トイフモノハ柔道ト同ジク極メテ身體四肢ノ發達ヲ助ケ道徳上ノ修養ニモダイニカアルモノデアルシレデ造士會デモ將來大ニ之ヲ將勵スルツモリテ他ノ体育ヨリモ此ノ柔道ト水泳トニ重キヲオイテアル本田存ナドモ私ト同シ考ヲ以テ水泳ヲ研究シ」テ居ルソレデ本田ハ最適任者ト思フカラ今年モ本田ニ水泳ノ指導ヲ託スル事トシタ皆ノ者モソノ

ツモリデヨク修行スルガヨイ・・・本田ヲ副監督トスル・・・」嘉納塾同窓會雜誌十八號附録「松輪水泳日誌」1899年（明治32年）12月。pp1-3.

註6)「・・・本校遊泳部が正に取らんとする所の方針は各流各派に偏せずして実用に適するもの体格の均齋なる発達に叶ふもの形式の勇壯にして美観を備ふるもの精神の修養に価値あるべき技術とその練習方法に就て其の精神を抽き之を整然たる教目に組織して斯道を以て教育の資料に最も価値あるものたらしめんとするにあり」東京高等師範学校校友會誌第五號1904年（明治37年）pp.190-192.

#### 参考文献

- 1) 真田久他、「嘉納治五郎主導による水術再編に関する研究」『体育学研究』52: pp.315-326、2007
- 2) 造士會、「嘉納塾同窓會雜誌」（明治26年：1839年～昭和6年：1931年）.
- 3) 上村春樹、「講道館百三十年沿革史」、「資料編」、「年表編」、講道館、平成24年.
- 4) 稲垣重造、「東京外語柔道部史」『東京外語柔道部史出版委員会』、昭和52年.
- 5) 東京外国語大学史編纂委員会、「東京外国語大学史－独立百周年（建学百二十六年）記念－」、東京外国語大学、1999（平成11）年.
- 6) 野中正孝、「東京外国語学校史-外国語を学んだ人たち」、不二出版、2008.
- 7) 講道館、「嘉納治五郎の外国語学習」『講道館柔道科学研究会紀要』、第15輯：pp.15-24、2015.
- 8) 日本水泳連盟、「図説日本泳法」、日貿出版、1975.
- 9) 東京高等師範学校校友會、「東京高等師範学校校友會誌（一部大塚学友會誌を含む）」（明治35年：1902年～昭和4年：1929年）